

## ➤ ブルーム (BROOME) = アイルランド

牡5歳・鹿毛 (アイルランド産・2016年2月8日生まれ)

父 : Australia = 母 : Sweepstake (母の父 : Acclamation)

馬主 : 松島正昭氏、ジョン・マグニア夫人、マイケル・テイバー氏、デリック・スミス氏

調教師 : エイダン・オブライエン

騎手 : ライアン・ムーア

戦績 : 全21戦7勝、2着6回

総獲得賞金 : 約1億7,890万円

主な戦績 : '21 サンクルー大賞 (仏 G1) 1着  
'21 ムールズブリッジステークス (愛 G2) 1着  
'21 アレッジドステークス (愛 G3) 1着  
'19 愛ダービートライアルステークス (愛 G3) 1着  
'19 バリーサックスステークス (愛 G3) 1着  
'21 プリーダーズカップターフ (米 G1) 2着  
'21 タタソールズゴールドカップ (愛 G1) 2着  
'18 ジャンリュックラガルデル賞 (仏 G1) 2着

ブルームはアイルランドで生産、調教された鹿毛の5歳牡馬です。

アイルランドのエポナ・ブラッドストック社の生産馬で、1歳時のタタソールズ・イヤリング・セールに上場されて15万ギニー(約2,360万円)で落札され、ジョン・マグニア夫人、マイケル・テイバー氏、デリック・スミス氏の三者の共同所有馬としてアイルランドのエイダン・オブライエン厩舎に入厩しました。馬名のブルームは西オーストラリア州キンバリーにある秘境観光の中心地として知られています。

ブルームの血統は父オーストラリア(その父ガリレオ)、母スウィープステイク、その父アクラメーション。父オーストラリアは2、3歳時に8戦5勝、2着2回、3着1回。3歳時は英2000ギニーで3着の後、英ダービー、愛ダービー、英インターナショナルステークスを優勝、次いで愛チャンピオンステークスで2着でした。引退後はアイルランドのクールモア・スタッドで種牡馬入り。代表産駒には本馬のほかにも、プリーダーズカップマイル優勝のオーダーオブオーストラリア、英セントレジャーのガリオクローム、ガネー賞のマレオーストラリスなど。ブルームの母スウィープステイクはイギリスでリストッド競走ナショナルステークス(芝1,010m)を勝ち、アメリカではG3アパラチアンステークス(芝1,600m)で2着。母としてブルームに加えて、その全弟となるポイントロンズデルが重賞勝ち。今年5戦4勝、2着1回で来春の英2000ギニーでも有力候補に挙げられています。

ブルームのデビューは2歳7月の2歳未勝利戦(キラニー、芝1,620m)で、ここは後に英ダービー馬となるアンソニーヴァンダイクの5着に終わりましたが、2戦目(ゴールウェイ、芝1,670m)は出遅れたもののハナを奪って1馬身半差で勝ち上がり、重賞戦線に進みます。ヨークのエイコムステークス(英G3、芝1,400m)は翌年の愛2000ギニーを制すフェニックスオブスペインの6着、レパーズタウンのジュベナイルステークス(愛G2、芝1,600m)は英ダービー2着となるマッドムーンの2着、2歳戦の最後としてフランスに遠征したジャンリュックラガルデル賞(パリロンシャン、仏G1、芝1,600m)は残り300mまで先頭を守り、最後も勝ったロイヤルマリーンにクビ差食い下がる2着に健闘しました。

3歳を迎えたブルームは父が制した英、愛のダービーを目指して4月のバリーサックスステークス(レパーズタウン、愛G3、芝2,000m)に出走。後方から進出して残り300mで先頭に立つと、あっという間に差を広げて後に愛ダービー馬となるソヴリンに8馬身差をつけて優勝しました。鞍上はライアン・ムーア騎手。同じ舞台で行われた5月の愛ダービートライアルステークス(レパーズタウン、愛G3、芝2,000m)も後方から直線で良く伸びて2着のプレナムパレスに2馬身半差をつけて2連勝を飾りました。この時のジョッキーは、現在、調教師になっているドナカ・オブライエンでした。迎えた英ダービー(エプソム、英G1、芝2,410m)もドナカ・オブライエンを鞍上に後方から進出して、直線ではよく伸びて13頭立ての4着で入線。勝ったアンソニーヴァンダイクと3/4馬身差という際どい競馬に持ち込みました。続く愛ダービー(カラ、愛G1、芝2,400m)はマイペースの逃げに持ち込んだソヴリンの6着に敗れ、これを最後に休養に入ります。その後日本の松島正昭氏に所有権の一部が

売却されて4名での共同所有となりました。秋には、武豊騎手を鞍上に配し、凱旋門賞出走を目指していましたが、体調が整わず回避しています。

激しい競馬が続いた3歳戦の反動からか4歳時は2戦しかしていません。新型コロナウイルス禍によってエプソムからニューマーケット競馬場に舞台を替えて行われた6月のコロネーションカップ(英G1、芝2,400m)は、この年のカルティエ賞年度代表馬となるガイヤースに9馬身1/4離された4着。4ヵ月半の間隔を取って臨んだ英チャンピオンズロングディスタンスカップ(アスコット、英G2、芝3,190m)は、重馬場と不慣れな長距離戦が影響したのか勝ったトゥルーシヤンから62馬身余りも離れたしんがりに敗れました。

4シーズン目となった今年は一転して積極的にレースに使われています。3月のデヴォイステークス(ネース、愛L、芝2,000m)から始動して、2着のサンチャートに3馬身半差をつけて完勝。ゆっくりとしたスタートから、向正面で2番手に上がって残り400mで独走、ものの違いを見せつけました。鞍上はシーミー・ヘファナン騎手。幸先の良いスタートを切ったブルームは、4月のアレジッドステークス(カラ、愛G3、芝2,000m)と同舞台で行われた5月のムールズブリッジステークス(愛G2)を、ともにライアン・ムーア騎手で連勝。前者では中団からの半馬身差し切り、後者では好位から2馬身差抜け出しました。続く重馬場のタタソールズゴールドカップ(カラ、愛G1、芝2,100m)では、前走で破ったヘルヴィックドリームにゴール前で短アタマ差かわされて2着、同じく重馬場のハードウィックステークス(アスコット、英G2、芝2,390m)では3歳時にG1を2勝した4歳牝馬ワンダフルトゥナイトの1馬身半差の2着に入り、同厩のジャパン(6着)に先着しました。アレジッドステークスから4戦連続で手綱を握ったライアン・ムーア騎手はムールズブリッジステークス、タタソールズゴールドカップで2番手追走から先頭に立たせ、ハードウィックステークスでは待機策から直線で末脚を活かしました。7月以降の5戦でブルームはスタイルを確立したと言えるかも知れません。

フランスに遠征したサンクルー大賞(仏G1、芝2,400m)はアイルランド若手ナンバーワンのコリン・キーン騎手が配されて、珍しく早いスタートを切って先頭を奪い、長い直線も危なげなく押し切って優勝。待望のG1タイトルを掴みました。7月のキングジョージVI世&クイーンエリザベスステークス(アスコット、英G1、芝2,390m)は初騎乗となるウェイン・ローダン騎手に促されて早めに先頭に立ちましたが、最後は余力なく9馬身半差の4着になりました。9月のフォワ賞(パリロンシャン、仏G2、芝2,400m)は凱旋門賞を目指して日本から遠征したディープボンドの逃げ切りを許して1馬身半差の2着。本番の凱旋門賞は、当日の重い馬場に持ち味が活かせずドイツの伏兵トルカータータツンから9馬身3/4差の11着。この時の鞍上はようやく初コンビが実現した武豊騎手でした。

そして迎えたブリーダーズカップターフ(デルマー、米G1、芝2,400m)は地元のイラド・オルティス Jr. 騎手で中団を追走。最終コーナー手前でギアを上げて、直線入り口で先頭に立つ積極的な競馬を見せ、最後はゴドルフィンの3歳馬ユビアーの末脚に屈したものの半馬身差の2着に善戦。ヨーロッパ以外の馬場にも向くことをアピールしました。この時の走破タイムは2分26秒0。同じく遠征したジャパンは4着でした。

これまでに挙げた7勝の内訳は1,670m戦で1勝、2,000m戦で5勝、2,400m戦で1勝。左回りでは9戦4勝、2着2回。重馬場の成績は8戦4勝、2着2回。芝2,400mのベストタイムは前述のとおり、ブリーダーズカップターフの2分26秒0(良馬場)です。



2021年サンクルー大賞

## ➤ ブルーム (BROOME)

### ● 馬主：松島正昭氏、ジョン・マグニア夫人、マイケル・テイバー氏、デリック・スミス氏 (Masaaki Matsushima, Mrs. John Magnier, Michael Tabor, Derrick Smith)

ジョン・マグニア夫人は、故ヴィンセント・オブライエン調教師（エイダン・オブライエン調教師とは姻戚関係なし）の愛娘スーザンのことで、現在はクールモア牧場の経営者、ジョン・マグニア氏の妻。ジョン・マグニア氏はイギリス人のロバート・サングスター氏と共同で1975年にクールモア牧場を購入し、世界最大級の牧場へと導いた功労者です。サングスター氏が去ると、マグニア氏はイギリス出身のマイケル・テイバー氏を新たなパートナーに世界戦略を進め、その後イギリス人のデリック・スミス氏がメンバーに加わり、クールモアの所属馬は基本的にマグニア夫人、テイバー氏、スミス氏の3人で共同所有の形を取ります。

クールモアグループはアイルランドを拠点に、アメリカとオーストラリアに支場を有し、その屋台骨を支えた種牡馬であるサドラーズウェルズ、デインヒル、ガリレオの産駒でヨーロッパのGI戦線を席卷するばかりか、世界でも数多くのG1タイトルを獲得しています。アイルランドでの所有馬はエイダン・オブライエン、息子のジョセフ、ドナカの各調教師が手掛け、フランスではアンドレ・ファーブル、アメリカではトッド・プレッチャーら著名調教師へ預託されています。

ブルームは2019年の愛ダービー後に、ジャパンは翌年に、日本の松島正昭氏が共同馬主として名を連ねています。

### ● 調教師：エイダン・オブライエン (Aidan O'Brien)

1969年10月16日、アイルランドのウェックスフォード州生まれ。調教師の家庭に育ち、ジェームズ・ボルジャー調教師に師事して23歳で障害調教師となり、1993/94年シーズンから5季連続でアイルランドのリーディングタイトルを獲得し、アマチュア障害騎手としても1993/94年にリーディングに輝いています。また、アンマリー夫人はアイルランドの障害リーディングトレーナー、長男ジョセフ、次男ドナカも騎手から調教師に転身しています。

ヴィンセント・オブライエン調教師の引退を受けてクールモアの専属調教師となり、アイルランド(平地、賞金順)で1999年から毎年、イギリス(賞金順)でも2001、02、07、08、16、17年にリーディングタイトルを獲得。ここまでクラシックタイトルだけでも英2000ギニー10勝、英1000ギニー7勝、英ダービー8勝、英オークス9勝、英セントレジャー6勝、愛2000ギニー11勝、愛1000ギニー10勝、愛ダービー14勝、愛オークス6勝、仏2000ギニー5勝、仏1000ギニー1勝、仏ダービー1勝、仏オークス1勝と各国で数多く獲得。さらに、“キングジョージ”4勝、凱旋門賞2勝、ブリーダーズカップターフ6勝のほか、イタリア、カナダ、アラブ首長国連邦、香港、オーストラリアなど世界各国で350以上のG1タイトルを手中にしています。2017年にはアメリカの故ロバート・フランケル調教師が2003年に樹立したシーズンG1最多勝記録を3勝更新する28勝を挙げました。

今年もブルームのサンクルー大賞を始め、マザーアースで英1000ギニー、ロートシルト賞、エンプレスジョセフィンで愛1000ギニー、セントマークスバシリカで仏2000ギニー、仏ダービー、エクリプスステークス、愛チャンピオンステークス、スノーフォールで英愛オークス、ヨークシャーオークス、ラブでプリンスオブウェールズステークス、ジョンオブアークで仏オークス、テネブリズムでチェバリーパークステークス、ルクセンブルクでフューチュリティトロフィーステークスを制覇しています。これまでジャパンカップに管理馬を4頭出走させ、2004年パワーズコート、10年ジョシュアツリーとともに10着、17年はアイダホで5着、18年はカプリで11着でした。

### ● 騎手：ライアン・ムーア (Ryan Moore)

1983年9月18日、イギリス・バークシャー生まれ。父ギャリーは元障害騎手で引退後調教師、祖父も元調教師、弟のジェイミーも障害騎手として活躍。2000年5月に障害戦でデビューして初勝利を飾ると、03年に見習騎

手リーディングのタイトルを獲得。2006、08、09年にリーディングタイトルを獲得しました。

2006年にマイケル・スタウト調教師管理のノットナウケイトで英インターナショナルステークスを制してG1初勝利すると、近年は主戦を務めるエイダン・オブライエン厩舎の所属馬でG1タイトルを量産。クラシックは2010年ワークフォース、13年ルーラーオブザワールドで英ダービー2勝、10年スノーフェアリー、16年マインディング、20年ラブで英オークス3勝、さらに英2000ギニー2勝、英1000ギニー4勝を挙げているほか、“キングジョージ”は09年コンデュイット、16年ハイランドリールで2勝。国外でも2010年ワークフォース、16年ファウンドによる凱旋門賞2勝を始め、08・09年コンデュイット、13年マジシャン、15年ファウンドでブリーダーズカップターフ4勝、プロテクションистで勝った14年メルボルンカップなど世界各国でG1タイトルを量産しています。

今年も世界各地を転戦したため、イギリスでは48勝でリーディング27位に留まりましたが、ラブでプリンスオブウェールズステークス、ドリームオブドリームズでダイヤモンドジュビリーステークス、セントマークスバシリカで仏2000ギニー、仏ダービー、エクリプスステークス、愛チャンピオンステークス、スノーフォールで愛オークス、ヨークシャーオークス、マザーアースでロートシルト賞、テネブリズムでチェバリーパークステークス、ルクセンブルクでフューチュリティトロフィーステークスと各国でG1勝鞍を積み重ねています。

日本では2004年の京王杯スプリングカップで初来日し、10・11年にスノーフェアリーでエリザベス女王杯を連覇。2019年までは短期免許を取得して騎乗し、2013年にジェンティルドンナでジャパンカップ、アジアエクスプレスで朝日杯フューチュリティステークスを、モリスで15年マイルチャンピオンシップ、16年天皇賞(秋)を、ゴールドドリームで17年チャンピオンズカップを、サリオスで19年朝日杯フューチュリティステークスを制するなど、ここまで重賞16勝を含むJRA通算669戦129勝。2010年にはワールドスーパージョッキーズシリーズで総合優勝を果たしているほか、昨年の香港スプリントではダノスマッシュを優勝に導きました。